

<書評>

『標準組織学』を手に、始めよう医学の勉強を！

「標準組織学 各論 第5版」

藤田 尚男, 藤田 恒夫●原著

岩永 敏彦, 石村 和敬●改訂

評者 後藤 薫(山形大教授・解剖学)

『標準組織学 各論』の改訂第5版が7年ぶりに出版された。この本は、総論と合わせて執筆者の名前を冠した「藤田・藤田の組織学」として知られており、1976年の第1版から40年以上の長きにわたり、医学生や研究者に読まれてきた日本オリジナルの教科書である。当時医学生だった私自身は第2版との出会いに始まり、改訂版を購入し続け現在、第5版を手にして今日に至る。書棚に並ぶ「藤田・藤田の組織学」を眺めていると、学生時代に奥深い組織学の知識と格闘した日々、そして教鞭を執り始めた頃に何度も読み込んだ日々が、懐かしく思い出される。

さてその内容であるが、初版から本書の根底をなす理念、すなわち“それぞれの事象の単なる記載だけではなく、それにまつわる歴史や物語を入れて、どのようにしてその構造が明らかにされてきたか、将来どのような問題が残っているかをおのずと感じてもらえるような楽しい本にしたい”“わが国の研究業績を紹介し、できるだけそれに立脚して議論を進めたい”という熱い思いが伝わってくる。改訂を経るにつれ図版が刷新され新たな模式図が付加されてきたが、とりわけ第5版では、免疫染色を含めた光学顕微鏡のカラー写真がさらに増えた点と、ソフトカバーになり、見開きが良くなって紙面に鉛筆で簡単に書き込みができるようになった点が、大きな特徴である。

ぜひ一度手に取って、ページをめくっていただきたい。美しい写真やわかりやすい模式図を拾っていくと、本書が組織学アトラスとしての機能も兼ね備えている点にお気づきになるであろう。そして、心臓刺激伝導系の房室結節(田原の結節)を発見した田原 淳博士や、インスリンの抽出に成功したパンチング博士と助手の医学生ベスト、アドレナリンを単離した高峰讓吉博士と上中啓三博士、そして世界初のクローンマウス作製に成功した柳町隆造博士

のリアルな写真と共に紹介されるエピソードは、まさに「長い間に人類が生み出してきた文化や学問を背景にして、現在の医学が存在する」(「第2版序」より)ことを我々に知らしめるのである。医学は長年にわたる観察結果や臨床知見の蓄積に基づくものであり、個々の理論の構築や病因の解明、対処法に科学的にアプローチする学問である。しからば、知識の整理や蓄積と同様、日本そして世界各国の先人の業績とその物語を学ぶことが、未来の創造につながるものと信じる。医学生に、そして我々研究者、教育者に必要なものは、まさにこのような視点ではないだろうか。

欧米の教科書には、『グレイ解剖学』や『セシル内科学』『ハリソン内科学』など、著者名で知られる医学書が数多く出版されており、これらの名著は時空を超えて受け継がれているのが特徴だ。『グレイ解剖学』に至っては、ヘンリー・グレイが1858年に初版を世に送り出してから、150年以上も次の世代の執筆者によって継続して改訂が行われ、現在第41版を数えている。『標準組織学 各論』は、藤田恒夫先生と藤田尚男先生が用意周到な準備期間を経て上梓された組織学の教科書であるが、その改訂は現在、岩永敏彦先生と石村和敬先生に引き継がれている。本書が医学生や若い研究者によって、50年そして100年と読み継がれる未来を夢見ることは楽しいものである。

医学生諸君、『標準組織学』を日々の教本として基礎医学の習得を開始し、『グレイ解剖学』を人体構造の辞書代わりに、そして『セシル内科学』あるいは『ハリソン内科学』を書棚に並べ、さあ始めよう、解剖学の勉強を、いや医学の勉強を！

● B5・頁568 2017年1月

定価：本体11,000円＋税

[ISBN978-4-260-02404-4] 医学書院刊